

高等部研究

目 次

I 研究主題	61
II 研究主題設定の理由	
1 一人一人の生徒，一人一人の卒業後の生活	61
2 自分のよさやできることを生かすということ	62
3 作業学習中心の教育	62
III 研究目的	63
IV 研究仮説	63
V 研究内容・方法	
1 教育的ニーズの把握と分析	63
2 作業学習の内容の整理	63
3 支援の在り方の明確化	63
VI 研究の実際	
1 教育的ニーズの把握と分析	64
2 作業学習の内容の整理	67
3 支援の在り方の明確化	69
VII 実践事例 班別作業（農耕班の実践から）	
1 作業学習の概要	71
2 生徒にとって必要な指導内容とは	74
3 「よさやできることを生かす」ことにつながる支援の在り方とは	77
4 まとめ	79
VIII 研究の成果と今後の課題	80

I 研究主題

一人一人の生徒が 自分のよさやできることを生かす
作業学習の取り組み

II 研究主題設定の理由

わたしたちは、「一人一人の将来の豊かな生活につながる」という本校研究の視点から「卒業後」という将来に最も近く、学校生活から社会生活への移行のときを担う高等部として、研究の視点を次のように考えた。

一人一人の生徒，一人一人の卒業後の生活

自分のよさやできることを生かすこと

1 一人一人の生徒，一人一人の卒業後の生活

わたしたちは、生徒一人一人が現在及び将来において豊かな生活を送るためには、どのような課題や指導内容・方法があるか（教育的ニーズ）を以下の二つの視点から考えた。

一人一人の生徒を大切にする

生徒一人一人の豊かな生活像を、生徒、保護者、教師がともに考えるとともに、生徒の状態像を的確に把握することが大切である。

- 一人一人の生徒や保護者の願い
- 生徒自身が持っている適性や能力
- 発達、生活上の課題

卒業後の生活につながる



高等部卒業生の生活を見てみると「持てる力を十分に発揮しているか、心から楽しめる趣味を持っているか、人や地域社会との豊かなかかわりがあるか」といった問いに対し自信を持って「YES」と答えられる方は少数であろう。それは、わたしたちがこれまでも大切にしてきた生活の視点に「より現実的な、具体的な」という視点が不足していたこと、「自分で〇〇する、自分で決める……。」というような生徒の主体的な活動を重視することが不十分であったことが要因として挙げられるのではないか。したがって次のようなことが大切になる。

- 一人一人の卒業後の生活を想定すること
- 卒業生やその進路先からの情報を生かすこと
- 福祉施策や労働施策の充実や社会の変化に対応すること
- 主体的な活動を人や社会とのかかわりの中で発揮できるようにすること

わたしたちは、上述の二つの視点に立って教育的ニーズを導き出し、今後の指導内容や指導方法の工夫、ひいては新しい教育課程編成の基盤として位置付けたいと考えた。

2 自分のよさやできることを生かすということ

高等部の3年間という限られた時間を思うと、生徒たちがそれぞれ卒業後の生活で生かすことのできる実的な力を身に付けて豊かな生活を送ってほしいと考えるのは自然な願いであろう。わたしたちは、この将来の豊かな生活を次のように考えた。

何らかの働く活動に取り組むことのできる生活

自己選択・自己決定のできる生活

人とのかかわりの豊かな生活

余暇を楽しく過ごすことのできる生活



このような生活を全ての生徒が送れるためには、生徒の持っている主体性を引き出し、個性を尊重し、特性や能力を最大限に発揮できる、すなわち「自分のよさやできることを生かす」ように働き掛けることが重要である。そうすることによって、生徒が自ら、自分にとって必要なことの達成に意欲を持って取り組み、その結果成長し、自己実現を図っていくことにつながると考えるからである。わたしたちは、この「自分のよさやできることを生かす」ということを高等部の担う役割（特性）から、将来の豊かな生活に欠かすことのできない事項として、学部研究の視点に取り上げた。

3 作業学習中心の教育

一般に知的障害養護学校における職業教育は、「将来の社会参加・自立を目指し、社会人として必要な知識、技能及び態度の基礎を身に付ける」ことをねらいとし、作業学習をその中核的な指導の形態と位置付け、取り組んできている。新しい教育課程の編成に当たっても、一人一人の

生徒の将来の豊かな生活を目指しており、「働く生活」そのものと言える将来の生活に密接にかかわる作業学習を充実させ、指導内容、指導方法を明らかにしていくことは、本校高等部なりの職業教育の充実、今後の他領域、教科の研究、そして教育課程編成の基盤になると考える。

Ⅲ 研究目的

一人一人の生徒が「卒業後に自分のよさやできることを生かして生活すること」につながる作業学習の内容や支援の在り方を明らかにする。

Ⅳ 研究仮説

- 現行の指導計画を「一人一人の生徒、一人一人の卒業後の生活」に視点を当てて導き出した「教育的ニーズ」から見直していくことにより、一人一人の生徒が自分のよさやできることを生かす作業学習の内容が明らかになるのではないかと。
- 生徒自身が自分のよさやできることに気づき、人とのかかわりのなかで発揮できるように授業を改善していくことにより、卒業後に自分のよさやできることを生かして生活することにつながる支援の在り方が明らかになるのではないかと。

Ⅴ 研究内容・方法

1 教育的ニーズの把握と分析

高等部の生徒の教育的ニーズを導き出すための視点を整理するとともに高等部の集団としての教育的ニーズを分析し、そこから高等部で身に付けることが求められる指導内容、作業学習で求められる指導内容を明らかにする。

2 作業学習の内容の整理

「教育的ニーズ」を基に現行の指導計画を見直し、作業学習の全体計画の整理の方向性を明らかにする。指導内容の選択、組織に当たっては、班別作業に絞り込み、

「自分のよさやできることを生かす」という視点も加えて整理する。

3 支援の在り方の明確化

「自分のよさやできることを生かす」という研究主題に掲げた視点をどうとらえるのかを明らかにし、先に述べた豊かな生活像に近付けるためには何が必要となるかを生徒自身の力、わたしたちの支援の両面から整理する。そこから授業分析の観点を焦点化して導き出し、具体的な支援の在り方を明確にする。

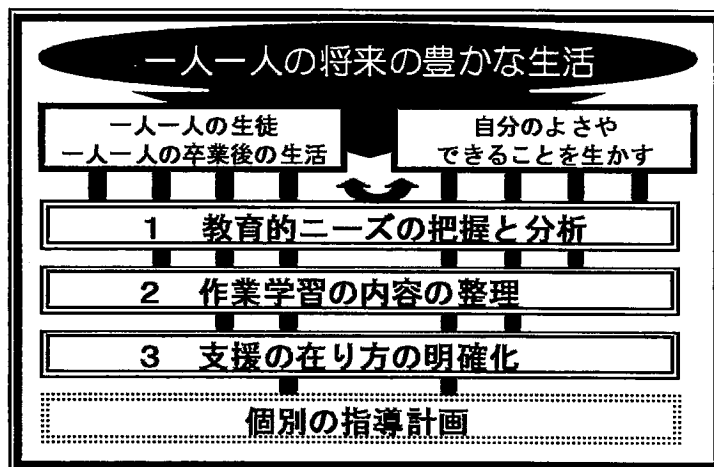


図1 研究内容・方法

VI 研究の実際

1 教育的ニーズの把握と分析

(1) 教育的ニーズを導き出すに当たって

ア 初期アセスメントに基づく情報収集，実態把握

- 一人一人の生徒や保護者の願い

(将来の願う生活像及びそのために身に付けさせたい事柄等)

- 生徒自身が持っている適性や能力

(興味・関心，意欲，好きなこと，領域別初期アセスメント等)

- 発達，生活上の課題（生徒の成長，生活に関する情報，領域別初期アセスメント等）

イ 卒業後の生活につながる，より現実的な視点による分析

- 一人一人の卒業後の生活を想定すること

生徒や保護者の将来に対する夢は，尊重しつつ，より現実的な視点で卒業後の生活を想定して，そのために必要な事柄をともに考える。

- 卒業生や進路先からの情報を生かすこと

このことは，社会に適応し得る生徒を育成しようということだけでなく，生徒が「自分のよさやできること」を発揮できる生活を送るために求められていることとも言える。

「知的障害者の就労の現実と継続に関する指導の課題 一事業所・学校・保護者の意見の比較から一」（日本障害者雇用促進協会 障害者職業総合センター）によると，表1のように一般就労に向けて事業所が強く求めている課題は生活する上で誰にでも必要な基礎的で一般的な事柄と言える。

表1 一般就労実現のための課題（事業所）

領 域	課 題
日 常 生 活	・ トイレが一人で利用できる ・ 食事のマナーが守れる
職 業 生 活	・ 物を無断で持っていけない ・ 素直に注意を聞く
	・ 自他の物が区別できる ・ 約束を守る
	・ 目印で自分のものが分かる ・ 怠けたり手抜きをしない
	・ 食事中騒いだりしない ・ うそや言い訳をしない
	・ 道具を使ったら必ず返す ・ できないときにごまかさない
協 調 性 意思の表示	・ 身近な人にあいさつをする ・ 自分勝手な行動をしない
	・ 名前を呼ばれたら返事をする

次に，本校卒業生の進路先へのアンケート（本校研究紀要第11集）では，本校の卒業生自身が困っていると思われることとして，「返事があいまいで会話が続かない。」「自分の意思をうまく伝えられないことで消極的な姿が多い。」などの職場での対人関係（コミュニケーション）を一番の課題に挙げている。職場や施設の方が困っていることに関しては，こだわりやパニック，勝手な行動を取ること，指示理解が難しいことなど，知的障害児の特性によるところが課題に取り上げられている。続いて学校教育に今後望むことに関しては，基本的な生活習慣の獲得を課題として取り上げ，その中では「あいさつや返事」「身の回りのことは自分でできるようになってほしい」ことなどが挙げられる。つまり，日常生活の中での課題の解決，仕事を進めていく上での基本的な態度と言える。

- 福祉施策や労働施策の充実や社会の変化に対応すること

「社会福祉基礎構造改革」

「法定雇用率の引き上げ」

「就労支援・生活支援の具体化」

「生徒を取り巻く地域社会の意識の変化」等

- 主体的な活動を人や社会とのかかわりの中で発揮できるようにすること

わたしたちは、生徒が、アで明らかになった一人一人の特性を生かして主体的に活動できるように適切な課題を設定しなければならない。また、イを受けて、一人一人の特性を人（社会）とのかかわりのなかで望ましい形で発揮できるようにということを念頭に置いて課題を探る。

(2) 教育的ニーズの分析

ア 教育的ニーズ

生徒一人一人の教育的ニーズを上述のような視点から導き出し、社会生活、職業生活、コミュニケーションに分けて、高等部全体では、どのような教育的ニーズがあるか、把握を行った。その際、個々の教育的ニーズを具体的な行動として達成が求められる力と意欲・態度などの内面の成長の二つに分けてとらえた。

(ア) 具体的な行動として達成が求められる力

- ・ 社会生活（職業生活）に関しては、小遣いを自分で管理したり、時間を意識して行動したりすることなどの実生活に役立つ実的な力が求められている。
- ・ 家庭生活に関しては、「家庭科」の内容そのものと言えるような調理や洗濯、掃除などの基本的な方法を理解し、実際に手伝い等の場面で生かすことが求められている。
- ・ コミュニケーションに関する項では、自分の思いを相手に伝えることや分からないことや困ったことがあったときに相手に伝えることが求められているが、ここでは、日常生活場面で、というより家族以外のあらゆる人とのかかわりとの関連が強い。

- 実生活に役立つ一般的で実的なこと
- 生活自立に必要な、家庭生活に関する基本的なこと
- 周囲の人に確実に自分の考えを伝えることができること

(イ) 意欲・態度などの内面の成長

ここでは、物事に対する意欲や主体的な行動に関することと、働く上での意欲・態度や興味・関心に関することが特に求められている。一人一人の子供によって、求められる力は様々であるが、おおよそ次のようなことが求められている。

- 物事に興味・関心を持ち、人とのかかわりの中で主体的に行動すること
- 気力やたくましさ・意欲といった働く（仕事をする）上で基本的な態度を身に付けること
- 興味あるものを増やし、自分の好きな物、好きなことを作ること

イ 作業学習で達成が求められる力

個々の教育的ニーズを基に作業学習において身に付けることが求められる力を、同じように整理すると以下ようになった。

また、現行の指導計画において達成が可能であるかを３段階（◎―達成のための内容が十分盛り込まれている，○―盛り込まれているが不十分である，△―ほとんどかかわる内容がない）で示した。（表２）

表２ 作業学習で達成が求められる力

	領 域	作業学習に求められる力	現行指導計画
具 体 的 な 行 動	社会生活（職業生活）に関する項目	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 金銭処理に関すること <ul style="list-style-type: none"> ・ 販売活動の経験を通して実生活に生かす ◇ 時間・時刻（暦）の概念形成に関すること <ul style="list-style-type: none"> ・ 作業の始まりや終わりの時刻が分かる ◇ 働く上での基本的な知識・技能に関すること <ul style="list-style-type: none"> ・ 機械の操作に慣れる ・ 製品の良・不良を区別する ◇ 体力の向上に関すること（身体機能の向上も含む） <ul style="list-style-type: none"> ・ 長時間の労働に耐える ・ 手指の巧み性の向上 	<p style="text-align: center;">○</p> <p style="text-align: center;">○</p> <p style="text-align: center;">◎</p> <p style="text-align: center;">◎</p> <p style="text-align: center;">◎</p> <p style="text-align: center;">◎</p>
	家庭生活に関する項目	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 調理や洗濯に関すること <ul style="list-style-type: none"> ・ 調理のレパートリーを増やす ・ 家庭電化製品の利用 	<p style="text-align: center;">○</p> <p style="text-align: center;">△</p>
	コミュニケーションに関する項目	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 適切なかかわり方に関すること <ul style="list-style-type: none"> ・ 何らかの伝達手段（サイン等）を通じた意思伝達 ・ 相手や場に応じた言葉遣い ・ 自分から進んであいさつをする ・ 相手の話をよく聞く 	<p style="text-align: center;">◎</p> <p style="text-align: center;">◎</p> <p style="text-align: center;">◎</p> <p style="text-align: center;">◎</p>
内 面 の 成 長	社会生活（職業生活）に関する項目	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 主体的な行動に関すること <ul style="list-style-type: none"> ・ 自信を持って行動，発言する ・ 見通しを持って物事に取り組む ◇ 働く上での態度に対すること <ul style="list-style-type: none"> ・ 責任を持って取り組む ・ 役割意識を持つ ・ 注意を集中する，持続する ◇ 働くことへの興味・関心・意欲に関すること <ul style="list-style-type: none"> ・ 興味のある活動を増やす ◇ 集団参加に関すること <ul style="list-style-type: none"> ・ けじめを付ける ・ 集団のきまりを守る 	<p style="text-align: center;">○</p> <p style="text-align: center;">◎</p> <p style="text-align: center;">◎</p> <p style="text-align: center;">◎</p> <p style="text-align: center;">◎</p> <p style="text-align: center;">○</p> <p style="text-align: center;">◎</p> <p style="text-align: center;">◎</p>
	家庭生活に関する項目	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 趣味（余暇の過ごし方）に関すること <ul style="list-style-type: none"> ・ 好きな活動を趣味として生かす 	<p style="text-align: center;">△</p>
	コミュニケーションに関する項目	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 周囲の人への積極的・意欲的なかかわり方に関すること <ul style="list-style-type: none"> ・ 周囲の人に対して話そうとする意欲を示す 	<p style="text-align: center;">○</p>

このように、一人一人の教育的ニーズを基に作業学習で求められる力について整理してみると、その達成のために必要な内容が、現行の指導計画においてほとんど盛り込まれていることが分かる。しかし、実生活で役立つ一般的で実際のな力（金銭管理，時計の利用など）や家庭生活に関する基礎的な力（調理や洗濯など），余暇利用に関することや自分自身を発揮する主体性といった内容には、これまでの作業学習では十分対応しきれていないということが分かった。

2 作業学習の内容の整理

(1) 作業学習の構造、目標の整理

ア 作業学習の目標

本校高等部のとらえている職業教育のねらいについては先に触れたが、学部教育目標を受けて具体的には次のように考えた。

社会の中で、自分を取り巻く人々と豊かにかかわり合いながら、働くことを通して主体的、自立的な生き方ができる生徒を育成する。

この目標の達成のためには、作業学習、現場実習、進路学習、それぞれの密接な補完関係が重要である。それぞれの目的は次のように考えた。

(ア) 作業学習

- 働く意欲や自覚を持ち、生産活動を通して製品と社会との関連（現実度の高い製品作りによる充実感と厳しさ）に気付くことができるようにする。
- 環境美化や家庭生活に関する作業活動を通して、奉仕の心を身に付けたり、自己の価値に気付いたりできるようにする。
- 自分の役割や仕事を最後まで果たし、働くことの大切さや現場実習への心構えや意欲を持つことができるようにする。

(イ) 現場実習

- 実際の職場で働くこと、人とかわることを通して、社会人としての生活を具体的にイメージし、卒業後の生活の見通しを持つことができるようにする。

(ウ) 進路学習

- 自分を生かす進路を選択する力を培い、卒業後の社会生活、家庭生活のための知識や技能を習得することができるようにする。

イ 作業学習の構造

現場実習や作業学習以外の指導の形態による進路学習との関連や表2の教育的ニーズを基に導き出された作業学習で達成が求められる力の分析を考慮しながら、次のように作業学習の構造（作業学習の形態）と主な内容を整理した。（図2）

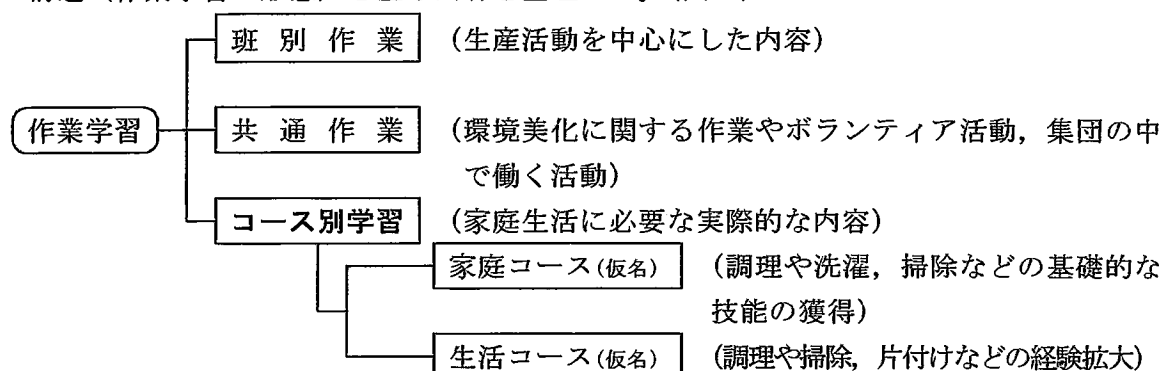


図2 作業学習の構造

「コース別学習」の取り組みは、教育的ニーズの分析結果から現行の指導計画では十分対応できていなかった実生活で役立つ一般的で実際的なこと、家庭生活に関する基礎的なこと、余暇利用に関することを効果的に指導できるように考え、本年度から取り組み始めた。家庭コースは、卒業後を想定したときに家事全般が可能な限り一人でできることが求められる生徒を対象にしている。生活コースは家事や自分の身の回りのことに対して多くの支援を要し、手伝い等の経験拡大が求められる生徒を対象にしている。それぞれの具体的な内容については現在整理中であるが、学校で取り組んだ調理の献立を基に家庭で一品のおかずを作ったり（家庭コース）、季節や行事に応じたお菓子、デザート作りに取り組むなかで主体性を発揮したり、家庭で母親と一緒に調理したり、手伝いをしたり（生活コース）などの成果が見られつつある。

(2) 指導内容の選択、組織

ア 年間指導計画における題材の選択・組織

題材を整理していく際、作業学習の目標の達成を念頭に置いた上で、生産活動、作業活動を通して気付きや成就感を持たせたり、あるいは、意欲や態度を育てようとするときに、現実度の高い製品作り、働くことの厳しさや働く意欲を感じたり持ったりできるような活動を用意することが重要である。したがって作業学習では、常に新しく現実度の高い製品の開発は進めながらもこれまでに取り組んできている製品作りを基本にしたいと考える。しかしながら、コース別学習については新たな取り組みとして上述の作業学習の目標に、具体的な教育的ニーズ、生徒のよさやできることを生かすという視点を当てて生徒の卒業後の生活につながる内容を様々な形で盛り込むことが重要になる。

イ 単元・題材における指導内容の選択・組織

ここでは、社会（地域）に出て働く経験、社会に出て認められる経験が生徒のよさやできることをさらに発展させると考え、これまで以上に社会との関連を強調した内容の配列に心掛けた。（例、定期的に販売の機会を設定する。題材の導入時には十分に時間をとり、製作（栽培等）する品目、規格、材料購入、販売計画、販売などに生徒自らかかわるようにする。）

題材は1つの仕事に習熟するため学期、年間を通して、というように長期的なスパンで設定する。また、題材とは別のテーマを設けて、そのテーマに向けた製品作りに取り組むことで働くことに対する意欲を高めたり、短期的な見通しを持たせたり、実社会に近い状況を作ったりする。（表3）

具体的な学習活動は、一人一人の教育的ニーズやよさやできることを考慮し、また、生徒主体で活動できるようにという視点を大切にして設定する。

表3 題材一覧（木工班H11年度）

月	題 材 名	テーマ等
5	○いろいろな道具の使い方	「現場実習」
6	○箱物の製作	
7		
9	○小物の製作	「現場実習」 「附養まつり」バザー 「ボーナス」
10		
11	○ペン立ての製作	
12		「施設訪問」プレゼン ント 「販売会」
1		
2		
3		

3 支援の在り方の明確化

わたしたちは指導方法の改善に当たって、主題に掲げた「自分のよさやできることを生かす」ということを大切にしたいと考えた。具体的には、教育的ニーズ、一人一人のよさやできることに基づく個に応じた授業づくり、自分のよさやできることを基にした生徒の主体的な活動を引き出す授業づくりを目指す。

(1) 「自分のよさやできることを生かす」とは

わたしたちは「よさやできること」は、「よさ＝適性」「できること＝能力」というアセスメント等によって見えてくるものと、生徒の「できる、できない、良いところ、悪いところ」というような部分的なとらえ方ではないそこにいる生徒そのもの、全体像という2面でとらえた。前者は、教育的ニーズの中に具体的な行動として、あるいは意欲や態度面の課題として表れてくるもので、後者は、生徒をいかに肯定的にとらえることができるか、そして「生かす」という支援の在り方に表れてくるものと考えた。また、全体像としての「よさやできること」を生かすためには、生徒自身が自分らしさに気づき、それを意識して人とのかかわりのなかで（状況に応じて）主体的に行動することが大切であると考え、自己認知、人とのかかわり、自己選択・自己決定をそのための要素としてとらえた。

(2) 「自分のよさやできることを生かす」ために（目指す授業像）

自分のよさやできることを生かすためには何が必要となるか。生徒自身の力、わたしたちの支援の両面から考えてみたい。（表4）

表4 自分のよさやできることの要件

	生徒自身の力	わたしたちの支援
自己認知	○自分自身のよさ、できることをできるだけ正確に知ること ○良いところだけでなく、苦手なこと、自分自身の課題など理解していること（自分自身を発揮すること）	●よいところを賞賛すること（賞賛は生徒のさらなる意欲につながる。） ●もう少しで達成できそうなことを中心に生徒に課題意識を持たせること（自らの課題を達成した喜びは向上心につながる。） ●集団の中で役割意識を持たせること（自分の役割のある生活は責任感につながり、役割を果たすことは自己効力感につながる。）
人とかかわり	△自分を発揮する対象・場所を意識すること △より良く見られたい、認めてほしいという願いを持つこと	▲闇雲に主体性を発揮するのではなく時と場に応じて発揮させること ▲生徒が人とかかわりの中で正しく自分自身を発揮できるような場の設定
自己選択・自己決定	◇自分のやりたいことを自分で選んだり、よく考えた上で自分自身で決定したりすること	◆分かりやすい選択肢を準備しておくこと、選択の機会を多く与えること ◆決定までには時間を掛け、適切なアドバイスを行い、最終的には生徒の決定を尊重すること

上の表の要素が満たされている授業がわたしたちの目指す授業像である。具体的には、作業学習における目指す授業像として次に設定した。

○ 作業学習における目指す授業像と授業分析の観点

- 生徒一人一人がそれぞれの仕事や役割を持ち、責任を持って与えられた仕事（役割）を果たす作業学習。
- 生徒一人一人が可能な限り自分で考え、行動する作業学習。
- 生徒一人一人がそれぞれの目標や課題を意識して取り組む作業学習。
- 生徒一人一人が達成感や成就感を味わうことのできる作業学習。

表5 授業分析の観点

授業分析の観点	生徒の姿	教師の支援
役割意識や責任感を持って活動しているか	◇ 役割を自分で選択する。 ○ 仕事場に来たら、自分の役割が分かる。 △○期待される役割が分かる。	◆ 分かりやすく伝える。 （個に応じた提示、選択肢の数など） ◆ 生徒の意思を受け止める。 （表情、身振り、指差し、サインなど） ◆ 生徒の意思決定を尊重する。 ●▲一定期間は同じ仕事に取り組ませる。
可能な限り自分で考え、行動しているか	◇ じっくり考える。 ◇△状況を見て考える。	◆ その生徒にとって適度な支援を行う。 ・過度な言葉掛けは控え、考える間をとる。 ・生徒に応じた形でヒントを提供する。 ・手順表等で自分で確認できるようにする。 ◆▲分かりやすく整理された環境を作る。
目標意識・課題意識を持って活動しているか	○◇目標を自分で決める。 ○ 自分にできること（技能面）が分かる。 ○△場に応じた行動ができる。	●◆適切な目標が立てられるように支援する。 ・1時間、1次、1題材の目標を生徒に分かりやすく提示する。 ・生徒に応じて目標を決める場や手順を工夫し、確実に意識させる。 ●▲目標・ねらいは仕事をする際に気付きやすい位置に提示する。
達成感・成就感を味わっているか	○△出来上がってうれしいと感じる。 △ 認められてうれしいと感じる。 △ 友達と一緒に喜ぶ。	●▲出来高チェック表などで、目標を達成したことを視覚的にとらえやすいようにする。 ▲技能面は作業中に適宜、態度面は終末など、賞賛は生徒が分かりやすいタイミングをとらえて行う。 ▲ 友達と共通の目標を立てたり、生徒によっては友達の目標も意識して協力できるように場の設定や仕事の分担を行う。

※○-●は自己認知、△-▲は人とのかかわり、◇-◆は、自己選択、自己決定にかかわる姿、支援（表4参照）



VII 実践事例：班別作業農耕班の実践から

研究の理論を受けて、班別作業の農耕班の現状から見えてくる課題を整理し、生徒にとって必要な生活重視の指導内容の選択・組織はどうあればよいか、また生徒一人一人のよさやできることを生かすための具体的な支援の在り方はどうあればよいかについて探ることとした。

1 作業学習の概要

(1) 生徒の実態

農耕班に在籍する生徒7名の作業学習に関する教育的ニーズを分析し、具体的な行動として達成が求められる力（生活スキルのな力…○）と、意欲や態度といった内面の成長（内面的な力…●）の二つの側面から整理するとともに、研究主題に掲げている一人一人の“よさやできること”につながる興味・関心のある活動に着目して実態把握を行った。

表6 農耕班に在籍する生徒の教育的ニーズの分析結果から

氏 名 (学年性別)	生徒に求められるもの（中心的課題） <スキルのな力○と内面的な力●>	よさやできることにつながるもの 興味・関心のある活動（作業学習に関して）
T 児 (1年男子)	○働く活動経験の拡大 ○金銭感覚 ●積極的な作業態度	・根気強く取り組む態度
U 児 (1年女子)	○時計や暦の概念形成 ○健康維持や体力の向上 ●積極的・自発的な人へのかかわり	・友達の世話をすること ・賞賛を受けた際の意欲的な活動
M 児 (2年男子)	○長時間労働に耐えられる体力の育成 ●集中して作業に取り組む態度	・粗大運動（力仕事） ・豊富な余暇活動経験（社会性）
Y 児 (2年男子)	○適切な道具の取り扱い（安全面） ●集中して作業に取り組む態度 ●集団の決まりを意識すること	・農耕及び園芸作業に対する興味・関心の強さ ・ものや人への積極的なかかわり
O 児 (3年男子)	○話し言葉を補う伝達手段の獲得 ●積極的なかかわり（言葉掛け等）	・見通しを持った際に発揮される根気強く取り組む態度 ・粗大運動（力仕事）
H 児 (3年男子)	○金銭の管理 ○基礎体力の向上 ●意欲的に作業に取り組む態度	・真面目な性格 ・堅実な作業能率 ・体を動かすこと
MT児 (3年女子)	○サインによるコミュニケーションの習慣化 ●見通しを持った行動	・見通しを持った際に発揮する意欲的な行動

上記の表から、生徒たちにとって、体力の向上や金銭の管理といった日常生活に必要な生活スキルのな力や、「働く」上での積極的な態度の育成が求められていると言える。

また、よさやできることを生かすために、ち密で複雑な作業内容（作業工程）よりも分かりやすい作業工程で粗大運動伴う活動内容を多く用意したり、具体的な見通しを十分に持たせた上で取り組めるよう配慮したりする必要があると思われる。



堆肥の運搬の様子

(2) 年間題材一覧及び各題材で主に取り扱った作物（平成11年度実施）

表7 題材一覧及び取り扱った作物

4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
春まき野菜の栽培				秋まき野菜の栽培						
春まき草花の栽培				秋まき草花の栽培						
ハーブの栽培・ハーブ製品作り										

春まき野菜	トウモロコシ, なす 等
春まき草花	マリーゴールド, サルビア, 鶏頭, ひまわり 等
秋まき野菜	サニーレタス, 芽キャベツ, ラディッシュ 等
秋まき草花	パンジー, クリサンセマム, 金せん花 等
ハ ー ブ	レモングラス, ペパーミント, ラベンダー 等

農耕班においては、題材の配列を主に「春まき」と「秋まき」に分けて、草花や野菜の栽培に関する基本的な知識・技能を身に付けることをねらいとしながら、作業を通して働く上での基本的な態度を育成することに努めている。また、平成8年度からは、天候や気候に左右されにくく、お茶や入浴剤といった生活に身近なものに加工できるという点から、ハーブの栽培及びハーブ製品作りの作業にも取り組んでいる。

(3) 指導内容の現状から（平成11年度実施『春まき野菜の栽培』から）

表8 現行指導計画における内容と取り組みの様子

指導内容	指導の実際及び生徒の様子
1 春まき野菜の栽培について話し合う。	班別作業の班編成との関係から、実質的なスタートが遅れてしまい時期的に種まきを急ぐ必要があったため、話し合い活動の時間は十分確保できなかったが、写真や実物などを用いてどんな野菜を栽培するかを話し合った。
2 種まきをする。	「すじまき」、「ばらまき」の方法を伝え、実際に種まきに取り組んだが、何の種をまいたかフィードバックする手立てが不十分だった。したがって生徒たちが学習内容を十分に理解するまでには至らなかった。
3 育苗の管理をする。	かん水を当番制にして生徒たちに育苗の意識付けを図ったが、自分たちでまいた種という意識が乏しかったため、ほとんど教師が行った。
4 農園の準備、定植をする。	耕起や整地、うね立て、施肥など生徒たちは意欲的に取り組むことができていたものの、座り込む、作業場を離れてしまうなどの光景も見られた。
5 定植後の管理をする。	学校行事や現場実習との関係で、班別作業の時間が十分に取れず、生徒たちが取り組めた活動は主に追肥や除草のみであった。
6 収穫をする。	悪天候、定植後の管理が影響し、大量に収穫することはできなかったが、生徒たちは収穫の喜びを味わうことができた。しかし、栽培に関する一連の作業の流れを見通すことが困難な生徒が多かったこと、無人販売中心で購入相手と直接かわる機会が少なかったことなどから生徒たちが達成感・成就感を十分に味わえたかどうか疑問が残った。
7 春まき野菜の栽培について反省をする。	春まき草花の栽培と併せて、学期の反省を行ったが、生徒の中には、どんな作物を栽培したか答えられない者もあった。収穫したものを販売する活動については興味を示した。

(4) 支援の在り方を振り返って（野菜栽培に関する過去3年間の取り組みから）

表9 教師の支援と生徒の様子

主な支援の観点	教師の働き掛け	生徒の様子から
学習環境の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・ 農園（畑）での栽培が中心。集団の中で個別的な配慮をしながら、働く上での基本的な知識・技能・態度の育成に努めた。生徒の実態に応じた手立てを工夫しながら「全員で同じ活動に取り組む」ことを重視した。 ・ 一斉導入から始め、生徒たち全員で今日の作業の確認をしたり、「今日の目当て」「出来高目標」を決めたりした上で、作業に取り組めるようにした。終末においては目当ての反省を行ったり、出来高の確認をしたりして全員で作業を振り返るようにした。 	<p>→ 働く上での基礎的な体力や持続力の向上が見られた。しかし、農園での活動において、自分の仕事（作業）が分からず作業に対する見通しを持つことが困難であった。</p> <p>→ 目当てや出来高を意識して意欲的に作業に取り組む様子が見られたものの、その時間に何を学んだか一人一人が理解するまでには至らなかった。</p>
教師のかかわり方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒が活動に対して見通しが持てずにいる場合、「どうしたの？」など教師が積極的にかかわったり、絵や写真を用いて一つ一つの活動についての見通しを持たせたりして様々なコミュニケーション手段を使った意思の疎通を図るようにした。 	<p>→ 身振りサインを添えるなど意思の疎通を図ることができるようになったものの、困ったとき、分からないときの自発的なかわりが少なかった。</p>
教材・教具等の開発・活用（補助具・治具）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の導入段階において作業の見通しが持てるような教材・教具を開発し、具体的に説明しながら活用した。特に個別的な配慮が必要な生徒に対して、「いかにできるようにするか」を意識しながら、補助具等の開発に当たった。 	<p>→ 個別的な配慮が特に必要な生徒は、可能な限り自分の力で作業に取り組むことができていたものの、一人一人（特に軽度）の生徒に応じた教材・教具は十分とは言えなかった。</p>

以上、述べてきた農耕班の取り組みから、次のことが問題点として挙げられる。

- 現行の指導計画に示されている農耕班の指導内容は、発達の段階に基づいて網羅されているものの、生徒たちにとって、より作業の見通しが持てるようにするために、また“自分の仕事”という意識を持てるようにするための内容も加えるべきではないか。
- 成就感・達成感を味わうことができる内容が示されているものの、そのことが「自分のよさやできること」として自己認知できるような内容や、周囲の人から認められるような内容を明確に位置付けるべきではないか。
- 授業の中で、一斉指導と個別指導のバランスを考え、一人一人をこれまで以上に大切にしたい授業設計を考えるべきではないか。
- 教師は、これまでに一人一人に応じた適切なかわり方をしてきたのか。「自分から～する」という生徒の意欲をかき立てるような手立てを工夫すべきではないか。

●…指導内容に関すること、○…支援の在り方に関すること

そこで、これまでの反省を踏まえた上で、指導内容の選択・組織に関することと教師の支援の在り方に関するについて、理論を基に改善策を探りたい。

2 生徒にとって必要な指導内容とは

(1) 『春まき野菜の栽培』の取り組みでの反省から

先に述べたような問題点から、現在在籍する生徒の実態と、導き出された教育的ニーズの分析との結び付きを考慮し、以下の検討事項を挙げることにした。

- 「将来の豊かな生活」につながる農耕作業の特性
- 現行の指導計画に示されている指導内容と生徒の実態との関連性

(2) 作業の特性から

農耕の作業を「将来の豊かな生活」という視点から考えると以下のことが考えられる。

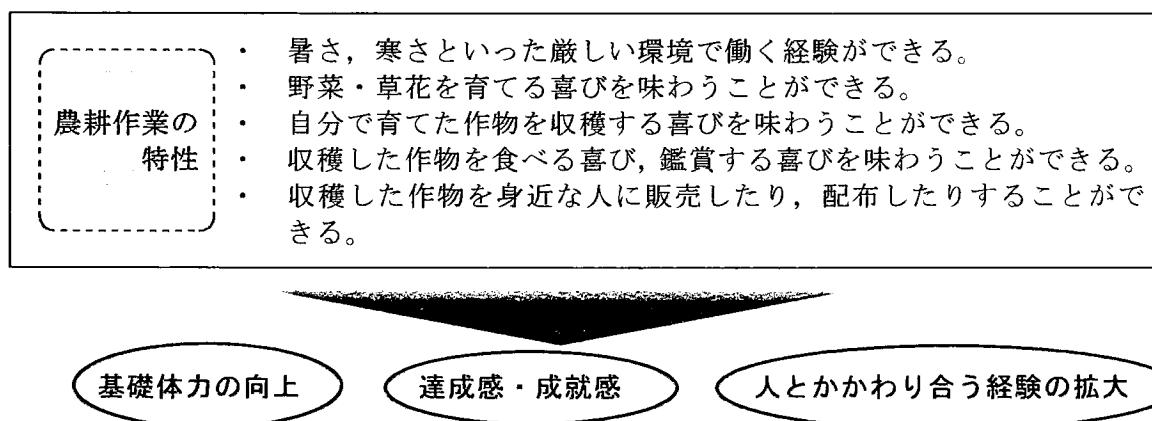


図3 農耕作業の特性と豊かな生活とのつながり

(3) 現在の指導内容が生徒の実態に応じたものであるのか

体力の向上や達成感・成就感を味わうこと、また将来の豊かな生活につながることに密接に関係すると思われる農耕班でありながら、表8のような課題が見えてきたため、現行指導計画上の『春まき野菜の栽培』の指導内容に示されているものが生徒の実態に応じたものか、また将来の生活と結び付くような内容であるのかを検証していく必要性を感じた。

そこで、農耕班で身に付けることができる力を探り、指導内容の選択・組織をしていく上での基本的な考え方を整理することとした。整理する際には、生徒の教育的ニーズや「自分のよさやできること」という視点を踏まえることに留意した。

- “厳しい環境の中で体力の向上を図ることができる” “収穫する喜びを通してより達成感・成就感を味わいやすい” といった農耕作業の特性を今後も大切にし、栽培の一連の流れに関する指導内容は継続する。
- 教育的ニーズの分析から導き出された“身に付けてほしい力”とのつながりから、
 - ・ 粗大運動を多く取り入れた活動内容を用意する。
 - ・ 販売など金銭を取り扱う活動を明確に位置付ける。
 - ・ 人（社会）とかかわり合う機会を増やす。

このように、農耕作業の特性と豊かな生活とのつながりから、体力の向上、達成感・成就感、人とのかかわり合う経験の拡大という3つの観点を新たに盛り込む。

(4) 『秋まき野菜の栽培』の取り組みを通した指導内容の改善

これまで述べてきたことを踏まえ、本題材に取り組むに当たって、以下の点に留意した。

- 取り扱う作物は、寒さや病害虫に強く、秋まき野菜の中でも栽培の比較的容易なサニーレタスを中心的に取り扱う。
- 栽培方法は、従来の農園（畑）での栽培に加え、プランター容器での栽培も取り入れる。
この方法により、作業を行う際、天候や気候の影響を受けにくいだけでなく、自分の作業（やること）が分かりやすく作業の見通しを持ちやすくする。
- プランターによる栽培を通して、生徒たち自身が、より「自分（たち）が作る」という意識を持ち、自分の仕事に責任を持つことができるようにする。
- 生徒自身が「自分（たち）」のサニーレタスを収穫することで、より達成感・成就感を味わうことができるようにする。
- 指導内容に販売活動を位置付け、収穫したサニーレタスを学校関係者や地域の人々に販売する（配布する）機会を増やす。このことにより、流通（金銭の取り扱い）といった社会を意識できるような経験を広げるとともに、望ましい対人関係の向上を図る。

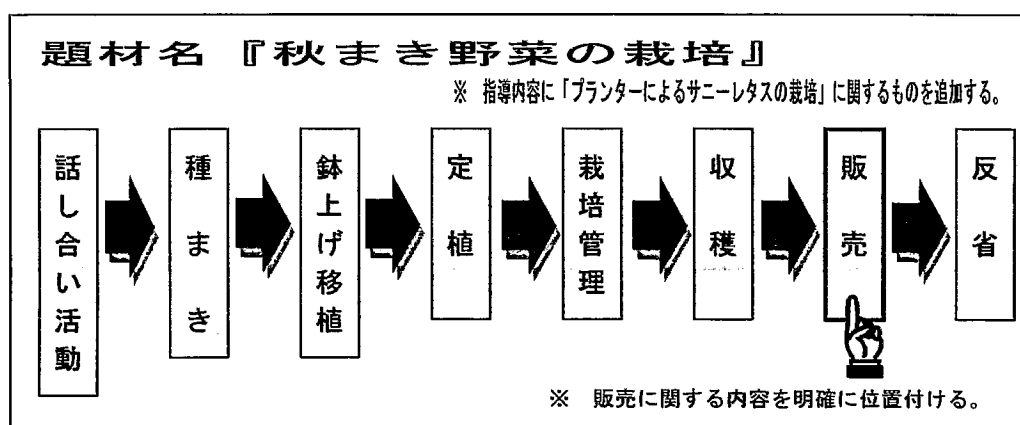


図4 『秋まき野菜の栽培』の指導の流れ

(5) 題材及び指導内容の方向性について（9～3月）

『秋まき野菜の栽培』の指導内容を整理するとともに、9月から3月までの現行指導計画上の各題材における指導内容の整理を行った。

『秋まき～』については、草花、野菜共に販売活動を位置付けるようにし、収穫した作物を本校関係者だけでなく学校周辺の人々にも販売する機会をこれまで以上に設けたい。

このような活動を通して、“収益を得る”達成感・成就感を味わえるよう

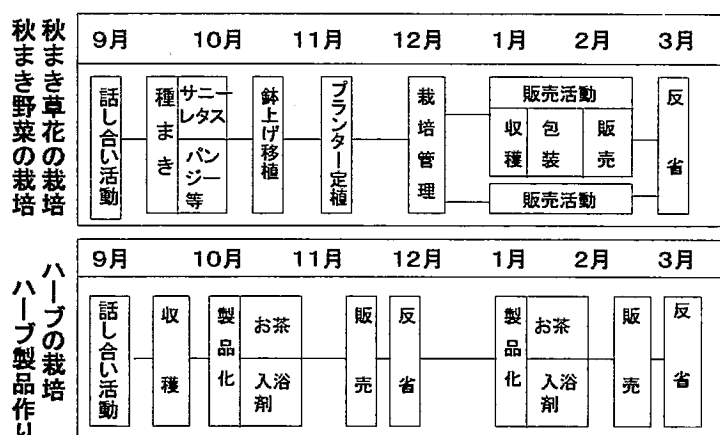


図5 9月から3月までの指導内容の流れ

な経験を増やすだけでなく、地域（社会）に出ていくことで社会をより意識できるようになるのではないかと考える。

ハーブの栽培・ハーブ製品作りにおいては、野菜や草花の栽培と同様に、販売活動を位置付けていくだけでなく、より現実度の高い（商品価値のある）製品作りに取り組めるようにしていきたい。



ハーブ製品作りの様子

(6) 年間指導計画の考え方

これまでの実践を通して、年間の題材配列及び指導内容の編成の在り方及び方向性について考えると、以下の点にまとめられる。

- 年問題材配列については、現行指導計画上に示されている題材を継続しながら、ハーブの栽培・ハーブ製品作りを4月から明確に位置付ける。
- 年間の各題材の指導内容に、教育的ニーズへの対応を図るため、流通、販売、サービスに関する内容を設定する（具体化する）。
- 『春まき～』『秋まき～』共に、同じ学習活動の流れを組みながら、『秋まき～』においては、『春まき～』の学習で身に付いた力を生かせるようステップアップした内容を用意するとともに、具体的な支援の在り方の改善についても工夫する。

（『秋まき～』では、教師の援助を減らすなど）

以上のような考え方を基に次年度以降は、表10に示した指導内容に沿って、年間の指導を行っていきたいと考える。

表10 題材及び指導内容の概要（平成12年度以降）

4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
●春まき野菜の栽培				●秋まき野菜の栽培									
●春まき草花の栽培				●秋まき草花の栽培									
話し合い	種まき	移植	定植	栽培管理	販売活動	反省	話し合い	種まき	移植	定植	栽培管理	販売活動	反省
●ハーブの栽培・ハーブ製品作り													
話し合い	種まき	差し芽	販売活動	反省	話し合い	販売活動	反省	話し合い	販売活動	反省			

※ 販売活動の中には収穫及び製品化を含む

3 「よさやできることを生かす」ことにつながる支援の在り方とは

研究の理論で述べた“目指す授業像”を実現するために、教師はどのような具体的な支援を考えていけばよいかを探った。

(1) 授業改善に向けて（基本的な考え方）

授業改善に当たって、農耕班では、以下の考え方を踏まえることにした。

- 授業に入る以前の段階からすでに支援は始まっている。学校生活や家庭生活の中で、いかに目標意識や課題意識を持てるようにするかが大切。
- 授業の導入は“生徒たち自身でできる”状況作り」の段階である。導入の時間の掛け方は、生徒の実態に応じたものでなくてはならない。
- 授業における展開部分は生徒一人一人が“できる状況”をいかに活用し可能な限り自分の力で作業に取り組めるかということが大切である。
- 授業の終末部分は、生徒たちがいかに本時の作業内容を振り返り、「何をしたか」が明確に分かるようにしなければならない。また達成感・成就感を味わうだけでなく、「次の時間にはもっと〇〇しよう」という意識を持てるようにしなければならない。

(2) 『秋まき野菜の栽培』における指導方法の改善

上述した授業改善に向けての基本的な考え方とP10で述べた作業学習における目指す授業像を踏まえ、農耕班の題材『秋まき野菜の栽培』における指導方法を工夫することとした。

表11 指導方法の改善に当たって

授業分析の観点（私たちが目指す授業像）	指導方法の改善のポイント
役割意識や責任感を 持てるようにするために	・ 生徒一人一人が、自分の作業について見通しをしっかりと持てるようにする。（「何をするか」が分かるということ）
可能な限り自分の力で 取り組めるようにするために	・ 生徒一人一人が、作業の中で、より自分の力を発揮できるようにする。 （生徒自身が「自分で考え、自分で取り組める」ようになること）
目標意識・課題意識を 持てるようにするために	・ 生徒一人一人が自分の課題に気付くことができるようにする。 （「自分のどこを伸ばせばよいのか」が分かるということ）
達成感・成就感を味わえる ようにするために	・ 生徒一人一人が、今日の作業でどんなことをしたのかが分かるようにする。（「自分の頑張ったこと」が目に見えること） ・ 生徒一人一人が次時の作業に対して意欲を持てるようにする。 （「次はもっと頑張ろう」という意識が持てるようになること）

表11に示したポイントを踏まえ、具体的にどのように指導方法を改善していくかを、生徒の教育的ニーズの分析から導き出された‘よさや興味のある活動’を配慮しながら、農耕班における主な支援の観点ごとに整理すると表12のように示される。

表12 指導方法改善の具体策

主な支援の観点	従来の支援の在り方 (『春まき野菜の栽培』から)	具体的な指導方法の変更点及び改善策 (『秋まき野菜の栽培』から)
栽培作物の選定 (取り扱う教材)	<ul style="list-style-type: none"> 生徒たちの生活に身近な作物を中心に扱ってきた。教材によっては、栽培期間が長期にわたるものもあった。 	<p>→ 可能な限り栽培が容易で、栽培期間も短い作物(教材)を用意する。</p> <p>また、一人一人が作業の見通しが持ちやすい容器栽培が可能なものを用意する。</p>
栽培方法	<ul style="list-style-type: none"> ビニル鉢で栽培した野菜を農園に定植する方法が中心であった。 	<p>→ 農園への定植は継続しながらも、自分の作業がより分かりやすく、また比較的管理もしやすいプランター栽培を中心とする。</p>
導入の在り方	<ul style="list-style-type: none"> 生徒全員を対象にした一斉導入の中で、写真や絵で表したカードを用いるなどして、時間を掛けて作業に対する見通しを持たせるようにした。 	<p>→ 導入の最初に、全員を対象にして大まかな見通しを持たせた後、発達段階や教育的ニーズに応じて小集団化する。その中で見通しの持たせ方を工夫し作業に対して一人一人が意欲を持てるようにする。</p>
展開時の 場の設定	<ul style="list-style-type: none"> 集団での活動を重視しピロティーや農園において全員が同じ活動に取り組むよう設定していた。可能な限りみんなと同じ場所で作業をすることを意識させてきた。 	<p>→ 導入の途中から小集団に分かれ、その中で自分の役割(何をすればいいか)を明確にする。作業場所は小集団ごと、または個別に対応できるよう弾力性を持たせるようにする。</p>
CTとSTの 役割 (教師の言葉 掛けも含む)	<ul style="list-style-type: none"> 主にCTが中心となって全体を把握するよう心掛け、STは特に配慮を要する生徒に付きっきりで指導・援助に当たることが多かった。 	<p>→ CTとSTがそれぞれ担当する小集団の把握に努め、可能な限り特定の生徒に付きっきりで指導・援助に当たることは控えるようにする。また教師は生徒からの自発的なかわり見られるまで、過度なかわりを控えるようにする。</p>
終末における 評価の在り方	<ul style="list-style-type: none"> 後片付けを全員で行った後の数分間で、全体で集合し一人一人に対して本時の作業内容を振り返るようにしてきた。 本時の全体的な出来高を口頭で知らせたり、具体物を示したりすることが多かった。 	<p>→ 原則として小集団内で生徒の実態に応じて時間を掛け、本時の学習をフィードバックできるような評価を行う。その後、班全体で互いの活動を賞賛し合えるよう全体での評価を行うようにする。</p> <p>→ 本時の一人一人の出来高について、量や質の度合いが分かるよう視覚的に訴える。</p>
授業場面以外での 教師の働き掛け	<ul style="list-style-type: none"> 栽培管理する上で、曜日ごとに水掛けを当番制にし、学校生活全般において管理を促す言葉掛けをしてきた。 収穫した作物を、各自持って帰るようにしていた。また「附養まつり」で販売したり、老人ホームの方々にプレゼントしたりしていた。 	<p>→ 自分の仕事という意識をより強く持たせるため、生徒によっては自分自身で栽培管理をしなければならない状況を設定する。</p> <p>→ 従来の方法も継続しながら、新たに、自分(自分たち)が収穫した作物を本校関係者や地域の人々に対して販売する活動を積極的に行うことで、さらに働く喜びを感じることができるようにする。</p>

(3) 授業分析から見えてくる具体的な支援の在り方

“目指す授業像”の実現に向け、これまで述べてきた指導方法の改善を図り、その授業分析を通して、支援の在り方に関して以下のように導き出すことができる。

- 生徒一人一人の教育的ニーズを踏まえた教師の支援を心掛けることが、より一人一人を大切にしたい授業設計につながる。(「学習集団の細分化」「得意な仕事内容を用意する」等の実践から)
- 授業の導入段階や授業場面以外で“できる状況作り”をしておくことが、展開部分で生徒が主体的に作業に取り組むことにつながる。
(「個人栽培スケジュール表」「作業場所・仕事内容写真カード」等の実践から)
- 生徒一人一人に、授業において達成感・成就感を味わえるようにし、次時の作業に対する意欲を高めることが、自分(生徒)なりに目標を意識して作業に取り組むことにつながる。(「サニーレタス個人出来高表」「個人の販売個数表」等の実践から)
- 自分の作業の結果が周囲の人に認められることによって、自身のよさやできることを認めることにつながり、もっと認められたいという社会的承認の欲求を生み出すことにもつながる。(「無人販売日の設定」「直接販売する活動」等の実践から)

4 まとめ(作業に取り組む生徒の様子から)

これまで述べてきた、指導内容の選択・組織、日々の授業分析によって導き出した支援の在り方の具体化によって、以下のような生徒の姿が見られた。

- ハーブ製品、野菜の苗などを生徒たちが直接販売する活動を通して、自分の作るものに対する責任感を持つようになっただけでなく、金銭の取り扱いに対する意識が高まってきた。また、売れたときの充実感を味わうことができたことで、働く喜びを感じ、次の作業に対する意欲も高まった。
- プランターによるサニーレタスの定植作業を通して、農園(畑)での作業よりも自分の作業に対する見通しが持てるようになり、意欲的に取り組む姿が見られるようになった。また、自分の作業に自信を持ち、教師の援助をできるだけ受けずに自分の力で取り組もうとする態度が見られるようになってきた。

上述した生徒の姿は、実践研究の成果と言える。

しかしながら、本研究で改善を図る題材及び指導内容の取り組みは、まだ試行錯誤の段階であり、明らかな生徒の変容を導き出すまでには至っていない。今後、理論研究で明らかになったことを踏まえて、実践研究を継続し、理論の検証をしていきたいと考える。



自分の作業に責任を持って(サニーレタスのプランター定植から)

VIII 研究の成果と今後の課題

一人一人の生徒が自分のよさやできることを生かす作業学習の内容について

成果： 班別作業においては、一人一人の生徒が自分のできることを生かして製作活動に当たる様子が見られた。製作品目や補助具の開発や柔軟な作業工程の設定等の結果と言える。

教育的ニーズへの対応を念頭に置いたコース別学習の取り組みは、生徒の興味や関心、保護者のニーズに合致しており、研究の実地で述べたように一応の成果が上がっている。

課題： この研究で明らかにした「卒業生や進路先の情報」等を生かして、一人一人の卒業後の生活、よさやできることを生かすことにつながる精度の高い教育的ニーズを導き出すことが必要である。

コース別学習は教育的ニーズの中でも緊急度の高いニーズであった家庭生活に必要な実内容的な内容を取り扱う形態だけにその充実、題材、指導内容の整理が急がれる。

卒業後に自分のよさやできることを生かして生活することにつながる支援の在り方について

成果： これまで大切にしてきた生徒に関する情報（初期アセスメント）に加えて生徒の具体的かつ現実的な卒業後の生活に着目したことは、生徒や保護者が進路に対して現実的な視点で考えるよい機会になった。

授業分析の観点を絞り込み、授業に反映させることで、作業に主体的に取り組む生徒の様子が多く見られるようになってきた。

課題： 生徒の職業適性検査の結果や現場実習の評価を見てみると一般就労はもちろん福祉就労においても意欲を持って取り組めていないといった課題が残る。わたしたちの研究の視点は地域社会からの要請に十分こたえ得るものであるか（生徒が社会の中で生かせる内容であるか）ということについて検討が必要である。

研究の深化とともに現場実習、進路学習と作業学習の結び付きを強くし、作業学習で見られる主体的な姿を社会に出たときにも発揮できるように、充実させていくことも重要である。

引用・参考文献

【引用文献】

日本障害者雇用促進協会障害者職業総合センター(1998)：知的障害者の就労の実現と継続に関する指導の課題－事業所・学校・保護者の意見の比較から－ P. 74

【参考文献】

鹿児島大学教育学部附属養護学校(1998)：研究紀要第11集 「一人一人の子供の将来の生活につながるコミュニケーション指導の取り組み」

大分大学教育学部附属養護学校学校授業研究会(1997)：障害児教育にチャレンジ② 「主体的に活動する子どもを育てる支援の工夫」 明治図書

長崎大学教育学部附属養護学校(1999)：研究紀要第14集 「子供の内面に焦点を当てた評価の在り方と授業改善」

鹿児島県立串木野養護学校(1999)：研究紀要 第25集 学部研究編

小嶋秀夫(1988)：「個性を発揮させる親側の条件」教育と医学第36巻 第8号 教育と医学の会

文部省(1995)：作業学習の手引（改訂版） 東洋館出版社